
深淵に立つ癒し姫

雁緒 采加

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深淵に立つ癒し姫

【Nコード】

N7250X

【作者名】

雁緒 采加

【あらすじ】

40歳女が転生を果たしました。ユリアナ伯爵令嬢5歳です。平穏な生活を送る予定だったのに元義理の息子に求婚されました。つて前世から50年たってるはずなのに何故20代なのでしょう？それに息子より5歳の少女に求婚するのも世間的にどうかと思います。

プロローグ

亡国の王は『力』を欲した。

他国への侵略のため

他国へ自国の脅威を見せつけるため

より多くの富を得るため

戦に続く戦で民は疲弊していた

王のもとに一人の男が現れる

魔導師を名乗る男は告げる

強大な『力』を王の手に献上してみせようよと

その為に生贄が必要だった

魔獣の骸、無垢な子供達の魂、そして異邦の乙女の鮮血

魔導師の言いなりに王は次々と生贄を集める

ある者は王を諫め反逆者として処刑され

ある者は己の保身の為子供達を集め生贄に差し出した

国を守るため多少の犠牲は仕方がない王宮に住む者は皆考える

しかし魔導師が示す『力』は王の為のものではなかった

強大な『魔』を生み出す為魔導師は『力』を欲し王を利用したのだ。

だが、魔導師によつて強大な『魔』が生み出されることはなかった。異邦の乙女の祈りにより『力』は共に贄となっていた子供達に渡される

乙女の死と引き換えに

彼らは『力』を使い魔導師を滅ぼす

しかし魔導師は己の命をもって『魔』を生み出す陣を発動させる
陣は大地深く刻み込まれ 力は弱いが多く『魔』が生まれ出てきた

『力』をもってしても滅しきれない『魔』に彼らは仕方なく陣の周りに封印を施す

深い深い森で覆い、『魔』が出てこられぬように、陣が人目にふれぬように

贄として集められた者たちは虐げられた民と共に決起し王家を廃し
新たな国をつくりあげた

『力』を得た子供の一人が建国の王となる
新たな王は10歳に満たない少年であった

ユーテリアス国建国記より

転生したようです

はじめに感じたのはまぶしい光

それから暖かな温もり

波のようにゆらゆら揺れる体が気持ちよくて瞼をあげれば

・・・だれ？この金髪のおじよーさん。

つてゆうかなんでこんなに手が小さいんだ自分。

いや、手だけじゃない、体が思うように動きません、声も出ません。生まれたての赤ちゃんになっっているようです。

どうやら転生というものをしてしまったようです。

- - - - - というわけで

声は「あー」とか「うー」しか出ませんが目と耳は問題ないようです
フル活用した結果。

私の今生の名はユリアナ・フィールゼン。

アルシャン国の伯爵令嬢だそうな。

伯爵といっても出世に興味がなく領地を村人と楽しく開拓しているこ
うという父様の意向でのんびりゆったり暮らしているようだ

両親と数人の使用人と共に王都からかなり離れた辺境の地で暮ら
している

10歳年の離れた兄がいるらしいが王都の学院に入学しているため
家にはいないとのことだ。

私が初めて見たきれいなお嬢さんはやはり母様でした
光り輝く金色の髪とエメラルドの瞳、白磁の肌。

はつきり言つて超人さんです。

10歳の息子がいるとはとても思えません。

特に声がとてもきれいで子守唄など聞いているだけで幸せになつて
しまいます

ちなみに父様も金の髪、ダークブルーの瞳のイケ面です

まだ自分の顔は見れませんがちよつと楽しみです

前世の記憶が正しければアルシャン国は国民のほとんどが金髪碧眼
だったはずなので母様の浮気ありえないっがなければ私の髪も金髪のはずでしょう
もと黒髪、黒目の私としてはうれしい限りです

転生前のわたし

ユリアナ3歳になりました

今はベットのうえで絵本をよんでいます。

どうやら私には魔力というものがかなりあるらしく幼い体には負担が大きく熱を出してはベットの住人です。

前世の記憶というのもどうやら悪影響を与えているようで膨大な記憶が幼い脳では処理しきれずショート。

高熱に魘され寝込む。の繰り返し

おかげで3歳までの記憶は曖昧です。

まあ、あまり思い出さないほうが精神年齢40歳のおばさんにはいいような気がします。

ようやく魔力も体に馴染んできて高熱で魘される事もなくなりだし、両親や他の人とも言葉でコミュニケーションがとれるようになり色々な情報が入ってくるようになりました。

どうやら今住んでいる処は前世での私の終焉の地の近くのようにです

私はもともとこの世界の住人ではなかった.....

地球の日本という国で小児科医をしていてあの頃は忙しくても毎日が充実していました

ここに召喚されるまでは.....

もう今はない国の王は『カ』を欲したらしい、その為に異世界の住人の生贄が必要だったのだそうだ

突然連れてこられ、閉じ込められた。
儀式を行うその時まで

でも、そんな愚かな王にもまともな臣下だっている
国の安寧の為に異界の者が犠牲になる事はないって城から連れ出し
てくれた

元の世界には戻せないが守ってやる……と

召喚の時に魔導師に付けられた印によって私はこの国を出る事が出
来なかった。

彼は国の辺境にある友人の元に私を連れて行ってくれた
力のある術師らしく、彼の息子（いや、息子がいた事にはびっくり
した）を預けていたらしい。

私に付けられた印を消すことはできなかったが感知されないように
封印してくれた

それから数年は平和だった

辺境の村までは追手が来る事はなく。私は彼にプロポーズされ、い
きなり8歳の子持ちになっちゃったけど本当に幸せだった。

魔導師あいつが来るまでは……

突然村に現れた魔導師は次々と村人を殺して行った
村の子供たちと私は儀式に必要なだからと捕えられた
彼も戦ったが魔導師の手によって殺されてしまった
私たちの目の前で……

魔導師は儀式を行うと言って陣を描き始めた

私にはなんの力もなかった。魔導師を阻止する事も子供たちを守る
事も

せめて子供たちだけでも守りたい！

……そう願った

魔導師の作りだす刃が私の胸に突き刺さって、あたり一面に鮮血が飛び散り大地に書かれた陣が輝きだした

かすれゆく視線の先には真つ青な顔で泣き叫ぶ息子あの子がいた

……ごめんね、巻き込んでしまつて。守れなくなつて。

それが私が覚えている最期

それからの事は転生してから知つた

この絵本もその一つ

50年前に起きたこの事件をもとに書かれた英雄王物語

あの子たちは「力」を得て魔導師を倒したそうだ

そして虐げられた民の為に新たな国を創つた

あの時にいた息子あの子の幼馴染の二人がユーテリアスの初代王、王妃となつて子供達までいるんだそうだ

風の噂では国は安定し、国王夫婦の人気はすさまじい程なのだそうだ
つらい過去だけど今、みんなが幸せであつてくれればうれしい

しかし息子は表舞台にはあまり出てこないらしく、今どうしているのか分かつていない

一体どうしているのか、少し心配です

義母ははとしてはもう少し大きくなつたら様子を見に行きたいものです

母はどの世界でも強いのです

「まあユリアナ、またその絵本を読んでいるの？」

今日もベットの住人となった私の様子を見に来た母様は呆れ顔で手元の絵本に視線を向けてきた

「はい、おかあさま。だって、えいゆうおうさまたちかっこいいです」

なるべく三歳児っぽく、かわいくかわいくと心に念じながら（この気づかいが知恵熱のもとなんだろうなあ）笑顔で返事をします

「本当にユリアナはそのお話が大好きね」

ええそりやあもう！

だって3歳児じゃあこの絵本ぐらいしか彼らの事を見る事ができません

子供向けにはなっています但本人たちをちゃんとモデルにして書かれているように赤髪の戦士、銀髪の英雄王、精霊王妃はあの子達の顔を思い起こさせます

赤髪のやんちゃな息子、ガーディアル。知的で頑張り屋のライナス。おっとりしたやさしいレイティ。

「でも絵本はお熱が下がってからにしましょう」

母様は絵本をサイドテーブルに置くと私をベットに横たえると子守歌を歌ってくれます。

子守唄を歌う時の母様の瞳はエメラルドの瞳の中に金色の輝きが見えます。

歌も素敵なのですがこの瞳がとても綺麗で私はいつも瞳を眺めてしまいます。

最近知った事なのですが、この輝きは癒しの力を使う時に現れるもので母様は子守歌を歌いながら私の体調が少しでも良くなるようにしていてくれたのです。

あ、ちなみに私の髪も金色で瞳は青と碧を混ぜたような色でした母様似の顔のおかげで自分で言うのもなんですが中々の美人になるにはと思っております

思わず鏡の前でガッツポーズをして侍女に変な目で見られましたが・

「リステリア、ユリアナは眠ったかい？」

ノックと共に父様が入ってきました。

まだ眠くはないのですがとりあえず寝たふりをします

「ええ、あなた今眠ったところよ」

母様と入れ替わり今度は父様が頭をなでてくれます

父様の大きな手が気持よくて本当にウトウトとしてきました

「あなた、前にお話しした魔術の先生の事ですが」

「ああ、しかしユリアナにはまだ早いのではないか？まだこの子は3歳だ」

「でも、この子の魔力は特殊です。このままでは体がもちません。大変かもしれませんが早く魔力のコントロールを出来るようにならなくては」

なんですとっー！

思わず起き上がりそうになる体を必死で抑え、両親の会話を聞いていきます

眠気なんてぶっ飛びましたよ

どうやら私の魔力は母様から受け継がれたようなのですが、母様曰く何かが違うようだとの事です。

母様にも分からないので専門の魔術の先生について勉強をしたほうがよいと

母様のように癒しの魔力を持つ者は稀な上、魔力に飲み込まれ精神に異常ときたす（怖っ）のだそうだ

3歳で早くも勉強なんてと父様は躊躇しているようですが母様の強い主張によって王都から家庭教師として魔術師がやってくる事がきまったようだ。

なににせよ早くも勉強の毎日になりそうです。知識は必要ですから早いのはいいことです

廃人は嫌なので魔術のコントロールは特に頑張りたいと思います
前世では魔術なんて使えなかったから少し楽しみですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7250x/>

深淵に立つ癒し姫

2011年10月21日08時09分発行